



溢れだす、人の波紋

過去に居住地域であった歴史的背景から、商業地域への転換の際、賑わいのポテンシャルを十分に活かし切れていなかった。富山駅周辺を始めとする、商業地域の賑わいと、それが生み出す人の流れに、作用する空間的手法で課題解決に寄与する。

○「富山市の顔」：活気をためて循環させるダムになる

活力の流れは一度きりのものではなく、自然の水の循環のように都市の隅々まで広がり、別のエリアに新たな活力を生むサイクルとなる。集まった人々の交流が街全体に影響を与え、新たな活力を呼び、街全体を循環的に育てる。この循環を通じて、都市の成長は一極集中ではなく、多面的に展開し、持続的な発展を遂げる。



ダム（富山県庁者エリア）

人・活力を集め、周辺のエリアに流す拠点。市民・外の人々にとっての居場所となるような、富山のシンボルとなる。

水（人・活力）

富山県庁舎に集まった人々が周辺エリアに立ち寄るように空間をつなぎ、活気・賑わいのあるまちを目指すための基盤をつくる。

成長点（駅・商店街など）

人と活力が流れ、魅力的なまちにしていく。水が自然に戻るように、受け取るだけでなく県庁に返したり、イベント等、協力してよりよいまちをともに目指す。

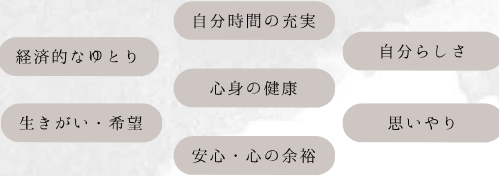
○well-beingなまちづくり

多様性の尊重、平等や公平の主張が飛び交う昨今。人間、ひとりひとりの生き方・考え方を大事にすることがより一層求められる時代であるといえる。それには、技術が進歩した世の中が持つデータ・数値的な指標を根拠とした客観的視点が重視される。一方で、well-beingなまちには、主観・感情的な個々の在り方の尊重すること、またその持続性への考慮が有用である。well-being、個人に寄り添い、人々の生活の豊かさの要素として支える空間を建築的手法で一部解決し、計画後の市民の行動で7つ指標すべてを満たしていく。



○well-being 7つの指標

目指すべきwell-beingの姿は右図のように7つの指標を満たすまちである。「心身の健康」「経済的なゆとり」「安心・心の余裕」「自分らしさ」「自分時間の充実」「生きがい・希望」「思いやり」の7つである。この7つを県庁エリアの計画と計画後の将来像で満たしていくことを想定している。

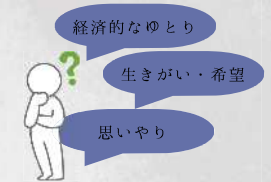


「対象エリアに人と活力を集める」をテーマに市民の方々との居場所となる空間設計を行う。



- 心身の健康
- 安心・心の余裕
- 自分らしさ
- 自分時間の充実

憩いの場、歩きたくなる場、ワーキングスペースなどさまざまな行動に適した地域の場となる。市民の生活に豊かさを与える。



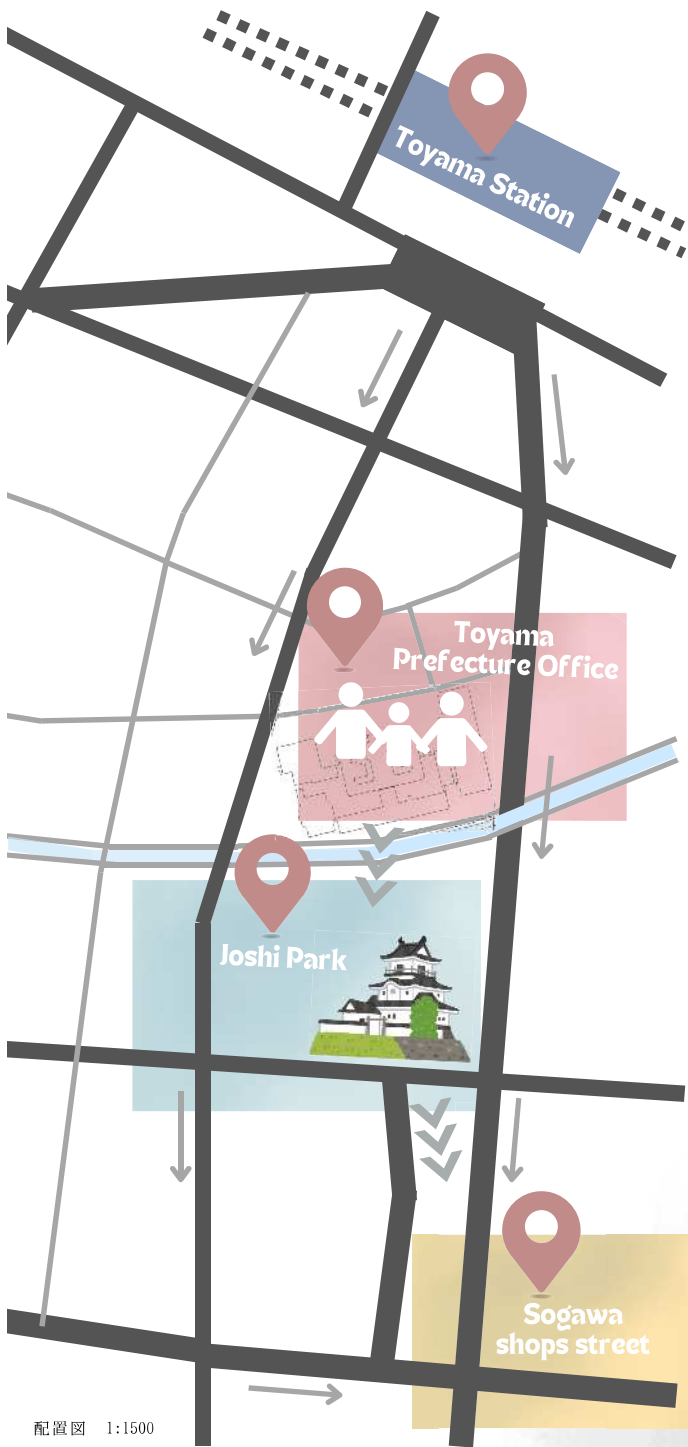
- 経済的なゆとり
- 生きがい・希望
- 思いやり

地域外の方を迎える拠点として、市民の方が自然にプレイヤーとなって盛り上げる。まちの魅力を高めて、市外に魅力を広めていく。



地域内から地域外へステップに分けて、私生活の豊かさ、まちへの満足度を高め、well-being達成を目指すしていく。

○駅から商店街までの人の流れ



○県庁との関係

エリア



富山県庁舎



富山駅



城址公園



商店街

周辺との関係性

・駅と商店街の中間点かつ、それ自体が活動の拠点となる。このエリアでのワーキングスペースや緑地、文化活動の促進が、人々を引き寄せる要素となりまちの活力を集めていく。さらに、地域の歴史や文化を取り入れたイベントで地元住民だけでなく観光客も巻き込んだ広範囲な活性化を図る。

・駅から商店街までの中間に位置する県庁舎エリアは、駅から再び商店街や城址公園方面に送り出す重要な拠点になる。訪れた人の溜まり場、帰宅する人が駅立ち寄るなど、多くの人にとっての「都市の顔」となる。

・城址公園は、歴史や自然の価値を持つ資源であり、松川の遊覧船という文化が地域に根付いている。県庁から城址公園までをシームレスにつなぐため、松川に人を集める機能を与える。県庁に遊歩道を設置し、誘導性を高める。これにより、公園がただの観光資源ではなく、日常的な憩いの場としても活用される。

・商店街で新たな活力を取り戻すためには人々の流れを引き込む必要がある。県庁舎エリアは、その活性化の起点として大きな役割を果たす。商店街までの距離があるため、県庁舎エリアで開催されるイベントやアクティビティが、商店街への集客を促す。

プレイヤーへの計画後の期待

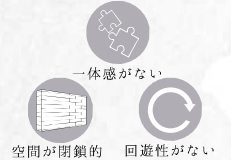
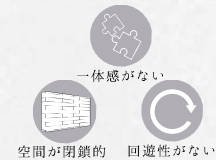
・駅からの人の流れがスムーズになり、まちを歩くことで魅力の再発見してもらおう。また、駅とエリアを結ぶ交通手段などを整備することで、駅からのアクセス性も向上する。県庁舎エリアは駅利用者にとっても便利な場所として認知され、富山市の顔となる。

・駅からのアプローチがスムーズで魅力的であることが求められるため、駅から県庁舎への歩道や緑地を整備し、歩行者が心地よくアクセスできる環境を整えるためのきっかけとなっていることを期待する。

・商店街との連携イベントなどを計画し、その来訪者が商店街まで足を運ぶようなプランを市民たちがプレイヤーとなって動いていく場として提供する。また、県庁舎エリアのビジネス施設やワーキングスペースを活用して、商店街と連携したビジネスや文化活動を促進することで、相乗効果を生み出し、街全体の経済活性化を促す。

・このような改修により、川辺でのイベントや季節ごとの催しが実現し、文化資源が活発な活動の場として再評価され、さらに県庁舎エリアと連携して観光資源の魅力を高めることが望まれる。

解決する課題



○富山県庁エリア 計画イメージ



ダムが水をためるように人を集め、水を流すように集めた人を流すイメージを持ってデザインしたエリア。将来的な計画を行う上での中心を担うエリアであり、訪れた人の気持ちに豊かさやゆとりを与えてくれるような憩いの緑地である。。またこの緑地は、「well-beingなまち」に大きく貢献し、訪れた人々の「歩きたい」を促す。歩き方・過ごし方にさまざまな選択肢を与えてくれるような導線計画で、日によって行きたくなる道が変わる場所になる。市民にとって、富山のシンボルとなるような場所を目指し、計画全体を通し、地域外に誇れるような魅力的なまちを形成していく拠点となる。富山市の外から訪れた人も、心が安らぐようなひとときを過ごせるような場所であり、多くの人の興味を引き付ける。まちの魅力・人々の安らぎが一度きりではなく、持続するようになんども立ち寄ってもらえるような、人々に寄り添う場所になる。



グリーンテラス（緑地エリア）

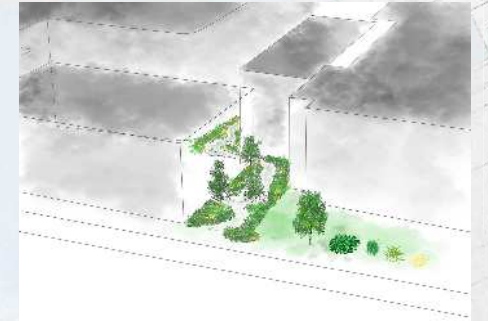


休憩・カフェ利用・ワーキングスペースなど個人に適した利用ができる。また訪れた人が歩きたくなる、歩きたびに表情が代わる緑地を形成している。休日にはファーマーズマーケットなど交流ができるイベントスペースとして利用もできるため、世代を問わず楽しめる空間を提供する。



レイクサイド(湖エリア)

植物・動物と共存し身近に自然を体験できる場所となる。グリーンテラスとは違い水をテーマにエリアを構成し、水を感じふれあいことで落ち着くかつ楽しめる空間にした。



緑の小道（県庁脇）

城址公園と大正エリアの一体感を生み出すため、県庁舎の小さな隙間も緑地としてデザインした。城址公園までの人の流れを生み出し、自然と引き込まれ歩きたくなくなるようなそんな空間を目指した。



リバーサイド(松川周辺)

城址公園と対象エリアを繋ぐ核となるリバーサイド。川へと緩やかな傾斜の芝生が広がり、休憩スペースとして活用できる。遊歩道を設置し、川のうえも歩けるようデザインし「歩きたい」を促す。